

保育における人形

高橋美恵子

(東京都練馬高等保育学院・てとて工房主宰)

<目的>

昨年より、ままごとあそびについての研究を発表してきたが、そのなかで、特に「人形」が独特の位置、役割を占めていることが、見られた。ごっこあそびと関連して用いられることが多いと思われるが、「人形」はどのように扱われ、またどんな役割をはたしているのか、そして、保育のなかで「人形」をどう位置づけるのかを考えたい。さらに、どのような人形を、用意するかも大きな問題であろう。いくつかの事例から、考えていきたい。

<事例>

① いままで人形がなかったクラスに人形をおく。

用意した人形は、リアルな赤ちゃん人形(40cm)を二体、藤かごのベッドにいれて、ままごとコーナーのすみに置く。コーナーであそび出した子どもが、気づいて、人形を抱き上げ、「わたし赤ちゃんがうまれたの」、とその時点で、母の役を明確に宣言している。それ以降、目が変わっても、その人形は、その子の人形として、占有されていく。他の子もつかいがたいが、なにか遠慮がちである。この場合は ままごとのなかに人形があることで、役割りをはっきり意識していくきっかけとなっている。

さらに、人形をめぐるあそびが発展していく。「あー、赤ちゃんが泣いちゃった」と言ってミルクをつくる、別の子どもが、「赤ちゃんにお洋服をつくってあげる」、と言い出し、ピンクの服を縫い、着せるふりをする。

そこへ、いつもは乱暴な男児がコーナーにはいつてくる。赤ちゃん人形を見ると、そーと目にさわり、寝かせたままでミルクを飲ませている。

(ソフトベビー人形40cm) (3歳児・幼稚園)

② 人形がいつも揃っているクラスで、保育者になりきって人形を寝かせる2歳児

B子が、人形にふとんをかけて寝かせていたが、置いたままで、他へ行く。A子が、やってくる。人形が寝ているのを見つけ、その場に座りこんで、人形を寝かせる。二体の人形の真ん中に座り、両方の人形に気を配って、トントンと布団の上からたたいて寝かせる。

他の子が人形をとろうとすると、ぎゅっと持って逃げだす。

A子は少し離れたベッドのほうに行き、ベッドに入ってる人形を取り出して、下で布団に寝かせる。ベッドと布団との両方に気を配り、寝かせている、とB子が戻ってくる。B子は自分のつかっていた人形をA子がかかっているの、とりかえそうとして、ひったくる。A子はおどろいて、取り返そうとするが、できない。それはあきらめて、そばにあった別のもの、クマのぬいぐるみを取り、布団にいれて、ベッドと布団と両方をトントンとして、寝かせるあそびを続けようとする。B子はクマもとろうとする。A子は、もとの人形を取り返す。そして、その人形を抱いて立ち上がり移動する。

③ 1歳児と赤ちゃん人形

赤ちゃん人形はごっこあそびがさかんになる3歳児以降に用いられるだろう、と考えていたが、2歳児のクラスで使ってみたところ、こどもたちは、クラスの赤ちゃんとして大切に扱っている。さらに、その2歳児たちが、散歩にでかけたある日、人形はいなくなった。帰ってきて、おどろいて探すと、となりの1歳児が部屋につれていって遊んでいた、という。

私のところへ遊びにきた1歳児も、赤ちゃん人形が気に入って、ベビーバギーに乗せて、そのまま部屋から出ていこうとした。1歳児からみても、リアルで、いかにも「赤ちゃん」という人形にたいしては、かわいがりたくなるのだろうか。

④ 人形をいじめるC子

C子は、ままごとが好きらしく、ままごとコーナーによくやってくる。この日は、お医者さんごっこに入ろうと、人形をつれて来る。医者役のSがいて、Cの連れてきた人形の診察をする。しかし、SはCに対し好意的ではなく、C子は不満な顔である。Sに向かって、「お願いします。入院してください。(入院させてくださいか)」という。そのまま、病院の中に入っていくが、何かいわれたらしく、コーナーから出てくる。そのあと、となりのままごとコーナーへ行き、電話を手にとる。他児が、Sに、「さわっちゃいけないってい

っているのに、さわっているよ」、と告げている。Sがやって来て、C子から電話をとりあげる。C子は、くやしそうにしている。保育者が他の電話を示し促すと、その電話をとって、話すふりをするが、気持ちは治まらず涙をふきながら、わざと乱暴にガシャガシャと音をさせたりして置く。Sが、近くを通ると、テーブルの下へもぐりこんでかくれるようにする。Sがいなくなると、出てきて、人形を持ち、ふり回し、首にひもを巻き付ける。えもんかけをもって、人形をたたく。Sがきて、えもんかけを取り上げる。人形を持って逃げて、はなれた場のテーブルの上にのせる。くびをひもでしばり、そのひもを持って投げ飛ばす。こわい顔をしている。ふりまわしながら、コーナーに入っていく。(Sに見せようとしているかのように) また出ていく。もとのテーブルのところへ戻り、人形の首を締める。ひもでぶらさげ、ふりまわす。人形をなげる。Sが来て、C子をぶつ。そばにいて女兒が、人形をひろいあげて、「かわいそうでしょ」、と言って、だきあげる。C子はしゃがみこんで大泣きになる。Sがいなくなると、別の人形をSに投げ付ける。(3歳児・保育園)

<考察>

① ままごとなど生活をベースにするあそびのなかで人形は、ひとつの役割、つまり小さな弱い存在として位置づけられ、かわいがられたり、世話をされる、という役を持つようだ。

② 人形という具体物があることによって、イメージをもつことを助けるのではないか。A子の場合、人形が寝かされているという状況から、自分がいつまでもらっている行為を思い浮べて、あそびに入っていたのだろう。大人のマネをしているのだが、A子の仕草やふるまい方は、完全に保育者になりきっている。

③ 1歳児というような小さい年令で、ごっこあそびが成立するか否かは、むずかしいが、この年令でも、自分よりも小さいものをかわいがり、世話をしたいと思っているのは、確かである。赤ちゃん人形をかわいがることで、自分をより大きなものとして位置付けるという意味を持つのもかもしれない。

④ 人形をいじめるという例は、まれであると思われるが、C子の場合、クラスの中で、他児から受け入れられていない子であり、そのことが、C子には堪え難く、追いつめられ、人形をいじめることへ向かっているように見える。人形をいじめるという行為は、自分をいじめるということなのではないか。

しかも、いじめる人形は、赤ちゃんの人形ではない。もう少し年令の高い人形であるということも注目される。

また、C子は「お母さん」の役を拒否する。おかあさんに役になりたくないと言う。C子は、二人姉妹で、姉が小学校の三年、家でもよくかんしゃくをおこし、母は手を焼き、姉がめんどうをみたりすることが多いという。母との気持ちの行き違いのような点も大きいのかもしれない。C子にとって、人形はあそびだけでなく、情緒面でも支えになっていると考えられる。

<まとめ>

わたしが観察をしている園においては、あそびの中で、人形を用いることは、かなり多くみられる。保育者も、人形を単なる物としてでなく、人格のあるものとして大切に扱う、という姿勢がつくられている。

保育の現場において、人形がつかわれることは、少なくともはないが、大切に扱う、ということから見れば、十分であるとはいえないであろう。

保育園や幼稚園という集団で用いるという前提で、考えると、人形という物は、所有の意識とも結びついており、保育者はより、柔軟な対応をもとめられるのかもしれない。とくに小さい年令においてはそうだろうし、こどもによって違いも大きい。この人形が好きで、ずっと一緒にいたい、ということも生じる。

ごっこあそびなどのなかで、役としてつかわれる人形も、どのようなものかいいのかを検討していくことが必要である。

また、C子のように、人形を「いじめる」という形であるが、自分の分身のように扱うことも人形の重要な役割であろう。

今回はいくつかの試みとして、人形を用いている事例をあげたというところにとどまっている。今後は、さらに保育のなかで、どう人形を扱っていったらいいのか、またどのような人形がいいのかも検討していきたいと考えている。